

sensu Matsumura を *O. vulgatum* sensu Nakai (1926) の異名としている。何故中井博士が *O. japonicum* sensu Matsum. を *O. japonicum* Pl. でないと決めたのか、また何故前者を *O. vulgatum* sensu Nakai と同定したのか、松村博士の同定した *O. japonicum* なる標本が一点もないので不明である。科学博物館に伊藤篤太郎氏が *O. japonicum* と同定した標本が 2 葉ある。1 つは no. 63210 で 1874 年に鹿児島桜島で採つたもので、これは現在目で見ればコハナヤスリである。もう 1 枚は no. 64233 で 1923 年に仙台で採つたもので、これは明かに *O. vulgatum* である。このような事情を考えると、当時日本で認識されていた“*O. japonicum*” すなわち *O. japonicum* sensu Matsumura というものはあいまいなものであつたらしい。そのために中井博士がそれを *O. vulgatum* sensu Nakai の異名としてしまったのであろう。1916 年に宮部工藤両博士が *O. japonicum* Pl. の再命名として *O. nipponicum* Miyabe et Kudo を発表した際に *O. japonicum* Pl. の文献として前記の植物名鑑をも引用している。そのため中井博士は *O. nipponicum* M. et K. も真の *O. japonicum* の姿をとらえていないと解釈されたらしく、それをも *O. vulgatum* sensu Nakai の異名としてしまった。後に宮部工藤両博士も *O. japonicum* sensu Matsum. と *O. nipponicum* M. et K. を *O. vulgatum* の異名にしている (北大農紀要 26: 1 1930)。しかしこの処置は先の小論中でもないつてのように妥当なものでなく *O. japonicum* Pl. の再命名としてはどこまでも *O. nipponicum* M. et K. が有効である。日本産のハナヤスリを 2 つ認識したのは松村博士の植物名彙 (1895) 以前に帝国大学理科大学植物標品目録 (1886) があり、中に *O. vulgatum* L. ハナヤスリ *O. lusitanicum* L. コハナヤスリの 2 種、他に小笠原諸島産のものとして *O. ellipticum* Hook. et. Grev. ナカバハナヤスリがある。牧野博士は植物学雑誌 (1897) 中で、コハナヤスリは *O. nudicale* L. fil. であり、小笠原の *O. ellipticum* も“この 1 品に他ならず”としている。しかしハナヤスリといいコハナヤスリといい当時の認識は極めてあいまいなものであり、実体は何であるか不明である。1880 年頃まではハナヤスリ属植物は全てハナヤスリ 1 種として扱われ学名は *O. vulgatum* L. で代表されて来た。1900 年頃になり大小 2 型ハナヤスリ、コハナヤスリが区別されるようになり、前者には現在の *O. vulgatum* と *O. petiolatum* が、後者には *O. petiolatum* と *O. thermale* が含まれていた。この状態は中井博士のモノグラフ (1926) が出るまでつづいた。

先の小論中の文献引用の誤りを指摘し、適切な助言を下さつた都立大水島正美氏に感謝致します。(千葉大学文理学部)。

○高等植物分布資料 (9) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (9)

○オオハシカグサ *Hedyotis Lindleyana* Hook. var. *glabra* Hara 上野・越後等大体

関東以北に分布する本変種を1945年7月三河東加茂郡小原村百目で発見した。ヒナラン、スギラン等三河では稀産の種が見出される地獄谷と称する所で数株を得た。分布の中心からあまりにも離れているようだが最近三重県からも不確実ながら報告があり、この地方の分布をつぶさに調べてみたい。(大原準之助一愛知県、岡崎市、柱町、稲荷)

○セリバシオガマ *Pedicularis Keiskei* Franch. et Sav. 中部日本特産の種で中央アルプス、南アルプス等の亜高山帯に豊産し恵那山が南限かと思われていたが、更に木曽山脈を南下して三河の山地にも分布することがわかった。即ち1951年8月北設楽郡豊根村茶臼山(1415 m)に、又1954年8月東加茂郡足助町寧比曾岳(1120 m)に発見した。共に水藪のひろがる林間の湿地に生じているが個体数も少く絶滅に傾いている。本種の南限として又海拔高の低い所にある点等注目すべきものであろう。(大原)

○コウシンヤマハッカ *Isodon Kameba* Okuyama var. *latifolius* Okuyama 中部地方信濃を中心として分布するカメバヒキオコシの変種である。さきに鳥居喜一氏により三河の茶臼山に採取されているが、更に西方の美濃及三河の一部にも得られた。1951年8月三河東加茂郡足助町山中及大多賀の二ヶ所、1956年9月美濃恵那郡上矢作町上村である。(大原)

○ミカエリソウ *Comanthosphace stellipila* S. L. Moore 越前・三河等より西の地方に知られる本種の北限と思われる産地を知った。即ち美濃郡上郡八幡町堀越峠に於て1957年10月、又飛騨大野郡清見村に同年11月採取した。前者は石灰岩地で数ヶの群落をなし発育も可なりよかつた。おな var. *tosaensis* Makino オオマルバノテンニンソウも紀伊尾鷲市九鬼入鬼山に大群落をなして産する。1951年4月、11月及1952年8月の調査によりわかつた。(大原)

○フトボナギナタコウジュ *Elsholtzia nipponica* Ohwi 信濃以西に分布する本種は必ず東海地方にも産するものと調査していた所、1954年11月三河額田郡額田町本宮山に、1955年11月三河北設楽郡富山村(佐久間ダム完成により水没)に又1956年11月伊勢度会郡三瀬谷村、1957年10月遠江周智郡水窪町白倉山に採取し、東海地方に於ける分布を確認できた。(大原)

○ミヤコアオイ *Heterotropa aspera* F. Mackawa 1950年以来三河東加茂郡旭村牛地・田津原・小馬山及北設楽郡稲武町富永に産する事を知った。又1955年8月飛騨益田郡小坂町落合木曽御岳西麓に採取し、栽培後花を見て確認した。1958年8月再び御岳西麓落合国有林内の別の地点にも発見した。今まで知られていた産地は鈴鹿山脈以西であるから、此等は分布の東限として注目に値する。(大原)

○ケヤリギボウシ *Hosta densa* F. Mackawa 1950年7月三河南設楽郡鳳来町川合、遠江磐田郡浦川町に於て、又1951年には三河北設楽郡東栄町及豊根村に於て、採取した。以上は豊川及天竜川沿岸であるが矢作川上流にも分布し1955年には三河稲武町及旭村に、又1956年には美濃上矢作町小田子にそれぞれ発見できた。この矢作川上流は本種の北限産地と考えられる。(大原)